着衣着火にご注意を！注意すれば防げる火災

はじめに

皆さん、料理をしているときに袖口を焦がしたり、たき火が衣服に燃え移ったりした経験はありませんか。
このような火災を着衣着火といい、平成 17 年中に全国で 144 名もの方が亡くなられています。
着衣着火は比較的皆さんの身近で起こりやすい火災なのですが、危険性についてはあまり知られていないのではないでしょうか。
今回は、この着衣着火の危険性と身を守る方法について紹介致します。

火災事例

神戸市内でも昨年は着衣着火による火災で 2 名の方が亡くなられています。状況としては次のとおりです。
お一人はガスコンロで湯を沸している際にコンロの火が衣服に燃え移りました。
もう一人の方は仏壇のロウソクの火が衣服に燃え移りました。
毎年このような痛ましい火災が神戸市内で発生しています。
この他、枯葉などの焼却火、ライターの炎、ガスコンロの炎、ガス溶断の際の火花が原因で 7 名の方が負傷されました。
負傷程度は重症 2 名、中等症 4 名、軽症 1 名でした。

着衣着火の危険性 着火の原因

着衣着火はガスコンロで調理をしている際に最も多く発生していますが、ライターや花火 ロウソクなどの身近な火源も原因になっています。
ライターが原因の火災ではタバコに着火した直後にライターをポケットに入れた時に炎が完全に消えておらず、衣服に火がついた場合があります。
着衣着火で亡くなられる方は一般的に 65 歳以上の方に多く発生しています。
しかし、負傷者は年齢を問わず発生しています。
衣服に炎が燃え移った際に炎が瞬間的に衣服の全面を走る現象が見られます。
これは表面フラッシュ現象と呼ばれるものです。生地の表面が起毛している場合、生地が空気を含んだ燃えやすい状況になっています。
そのため、いったん着火すると一瞬のうちに炎が燃え広がり、やけどになる可能性が高いのです。

着衣着火の危険性 衣類に炎が移ってしまったら

もし、衣類に炎が移った場合はお風呂や台所の汲み置きの水など身近な水で消火してください。
やけどをしたときは水道の流水で冷やし続けてください。冷やすことによりやけどの程度がそれ以上進行しません。
また、身近に水がない場合には地面を転がって消火してください。
袖に火がついたときは手を上に上げる等の危険回避行動を知ってください。
炎にびっくりして走り回ることがありますが、風にあおられ炎が逆に拡大します。

着衣着火を防ぐには

ガスコンロを使用する際に着衣着火が最も多く発生しています。
火口が 3 ヶ所～4 ヶ所あるガスコンロの場合、手前の火口を消さずに奥の火口に鍋などをかけようとすると危険です。
面倒でも、いったん手前の火口の炎を消してから行ってください。同じ理由から、ガスコンロの奥に調味料棚などを設けることは着衣着火の危険性を高めます。
袖や裾が広がっている衣服は着火しやすく、火が付いた場合にも発見しづらいので、炎を扱う際には着用しないようにしてください。
表面フラッシュ現象を防ぐためには起毛した素材 タオルの様なパイル地などは炎を扱う際に着用しないでください。
また、衣類等に燃えにくい処理をした防炎製品があります。
炎が接しても燃焼しにくく、火災の拡大防止には非常に有効です。
実際の火災でも隣の家からの炎を防いだりしています。この防炎製品はふとん類 毛布類 テント類 衣服類 障子紙など多くの種類があります。

おわりに

着衣着火は注意すれば防げる火災です。危険性に十分注意して炎を扱うこと、衣服に着火した際の対応方法などを知っておくことが大切です。

神戸市 消防局 予防課

〒650-8570 神戸市中央区加納町 6-5-1 神戸市役所 3 号館 9 階 市役所への道順・地図
電話:078-325-8510 Fax:078-325-8525 このページの内容についてメールで問い合わせする